

居住経験の共有による地域居住の維持・継承に関する考察

小 林 文 香*

(2014年11月12日 受理)

A Study of the Maintenance and Succession of Regional Dwelling through the Sharing of Dwelling Experiences

Fumika KOBAYASHI*

In order to examine the possibility of maintaining and securing the succession of regional dwelling, the present study conducted an interview survey to gather the dwelling experiences of citizens in district Z of Hiroshima City. The results can be summarized as follows:

- 1) Although many subjects wanted to live continuously in district Z, a mismatch between their current lives and residential houses was created following changes in family make-up and physical conditions of the residents.
- 2) Subjects who participated in regional activities constructed human networks in their regions, and were interested in their regional lives and found something to live for.
- 3) Some children, who had become independent of their parents, purchased used residential houses in district Z in order to live near their parents. This finding could be an option for regional dwelling in the future.

Keywords: dwelling experience 居住経験, regional dwelling 地域居住, maintenance 維持管理, succession 継承

1. はじめに

現在、高度経済成長期の都市部の人口増加に対応すべく開発された郊外住宅地を主とした計画的住宅地では、住民の高齢化、住宅の老朽化、空き家・空き地の増加が進み、住民の居住継続、地域コミュニティの継承が課題とされている^{1,2)}。これらの課題に対し、地域住民の居住経験、居住意向を明らかにし、居住継承のあり方が検討されている^{3,4)}。また、地域による主体的なまちづくりの実現のために住宅・宅地・世帯に関する情報を共有することの必要性についても指摘されている⁵⁾。

以上のように、これまで住宅地の継承については計画的に開発された住宅地が主な対象となってきた。しかし、計画的ではなく同時期に複数の業者による開発が行われ、同年代の世帯が一斉に転入する地域も存在する。このような地域では住民間で地域環境に関する共通認識を持つことは難しいと推察され、計画的住宅地以上に地域住民による主体的な住まい・住環境づくりが求められ

る。本研究では地域住民の主体的な取り組みの第一歩として、地域で住まいに関する経験や情報を共有することが必要と考える(図1)^{注1)}。そこで本稿では、地域住民へのヒアリング調査を通じ、地域における居住経験を明らかにし、居住経験の共有による地域居住の維持・継承の可能性について検討を行う。

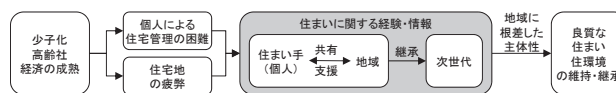


図1 調査の背景および目的

2. 調査概要

調査概要を表1に示す。広島市Z地区の地域住民16名を対象に、Z地区への転入経緯、居住歴、住まいの問題、居住継続・住み替え・住み継ぎの意向など

表1 ヒアリング調査概要

調査時期	2012年11月～2013年1月
調査対象	Z地区居住者16名(50歳台～80歳台)
調査内容	Z地区への転入経緯、居住歴、住まいの問題、居住継続・住み替え・住み継ぎの意向など

* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン・建築学科
准教授

表2 調査対象者の概要およびZ地区における住生活の変化

対象者	性別	年齢	転入年	転入経緯	Z地区転入時の入居住宅			Z地区での 住み替え歴	居住住宅 築年数	世帯構成の変化 [※]	
					住宅形態	所有	築年数			転入時	現在
a	女性	70代	1968	子育てのため	戸建	持家	新築	なし	築44年	夫婦+子	夫婦
b	女性	70代	1970	子育てのため	戸建	持家	新築	なし	築42年	夫婦+子	夫婦
c	女性	60代	1973	夫の仕事の都合	社宅・官舎	賃貸	－	1980年 新築戸建・持家	築32年	夫婦+子	夫婦
d	男性	80代	1976	子育てのため	戸建	持家	新築	なし	築36年	夫婦+子	夫婦
e	女性	60代	1979	子育てのため	マンション	持家	新築	2006年 新築戸建・持家	築6年	夫婦→夫婦+子	夫婦
f	女性	60代	1980	子育てのため	マンション	持家	新築	なし	築32年	夫婦+子	夫婦
g	女性	60代	1981	子育てのため	マンション	持家	新築	なし	築31年	夫婦+子	夫婦+子
h	女性	60代	1981	結婚を機にZ地区の夫の 実家近くに転入	戸建	借家	不明	2010年、夫の実家を リフォームし入居	築33年	夫婦+子	夫婦
i	女性	60代	1982	子育てのため	戸建	持家	新築	なし	築30年	夫婦+子	夫婦+子
j	女性	60代	1983	高校生の時に転入、一度地区を 離れるが、実家を住み継ぐ	戸建	持家	新築	1992年、建替え	築20年	夫婦+子	夫婦+子
k	女性	50代	1989	結婚を機に夫の両親と同居	戸建	持家	築5年	なし	築28年	夫の両親+夫婦 →両親+夫婦+子	父親+夫婦
l	女性	50代	1990	子育てのため	マンション	持家	新築	2000年 新築戸建・持家	築12年	夫婦+子	夫婦+子
m	男性	60代	1992	子育てのため	戸建	持家	築13年	なし	築33年	夫婦+子	夫婦
n	女性	50代	1992	子育てのため	マンション	持家	築1年	なし	築21年	夫婦+子	夫婦+子
o	女性	60代	1992	子育てのため	マンション	持家	新築	なし	築20年	夫婦+子	夫婦+子
p	男性	70代	1992	定年を前に終の棲家として	マンション	持家	新築	なし	築20年	夫婦	夫婦

※ 調査対象者 g, h, i, j, l, o は子の一部が世帯から独立している。調査対象者 p は子が独立してからの転入である。

題、居住継続・住み替え・住み継ぎの意向などについて、ヒアリング調査を実施した。対象地区の広島市Z地区は、広島市中心市街地から2kmほどに位置し、1970年代以降、山の斜面に沿って、住宅地の開発が行われた地域である。住宅団地のような大規模開発ではなく、10戸から20戸程度の小規模な戸建住宅地の開発や分譲マンション（以下、マンション）の建設が行われた。Z地区は現在5つの町丁から成り、町丁ごとの町内活動のほか学区単位の地域活動が盛んである。地区内には幼稚園、小学校、中学校、公民館がある。また生活施設として郵便局、コンビニエンスストア、小規模スーパーなどがある。

3. 結果および考察

(1) Z地区への転入から現在までの住生活の変化

調査対象者のZ地区への転入から現在までの住生活の変化を表2に示す。転入時期は1970年代～1990年代である。新築住宅への入居が主であるため、現在の居住住宅の築年数は20年～40年となる。転入後に地区内で転居している者もいる。Z地区への転入理由は、通勤・通学の利便性、経済的理由、教育環境の良さ、自然環境の良さである。世帯構成をみると、入居当時は「夫婦と子」だった15世帯のうち8世帯は子どもの独立に伴い「夫婦のみ」に変化している。また将来「夫婦のみ」となることを予測する世帯もある。

(2) 住まいの維持管理

1) 維持管理の時期および内容

調査対象者は1世帯をのぞき、同時期に同種の補修・改修工事を行っている。戸建住宅では子どもの成長に合わせた増築、高齢期に備えたバリアフリー化のほか、築20年を過ぎた頃から水周りの改修が行われている。また10年おきに外壁や屋根の改修が行われている。マンションでも住戸内では水周りの改修工事が行われており、マンション全体では定期的な大規模改修工事が行われている。なお、戸建住宅居住者のうち、隣近所で工事費用を積み立て、皆で外壁補修を定期的に行う事例が1件あった^{注2)}。

2) 補修・改修等の工事依頼先

補修・改修工事の依頼先は、戸建住宅居住者の場合、「知人・近隣の紹介」「親戚・知人の専門家・業者」が多い。理由として信頼できることがあげられた。マンション居住者の場合は、マンション販売業者ではなく、知人や

表3 補修・改修工事の依頼先選定

戸建住宅居住者	マンション居住者
・入居住宅の建設業者に依頼（2） ・建設業者の営業による（1） ・電力会社の紹介（1） ・親戚・知人の専門家・業者（3） ・知人・近隣の紹介（3）	・知人・近隣の紹介（4） ・ショールームにて決定（1）

（ ）内の数値は回答人数を示す。

同じマンション居住者に工事業者を紹介してもらっている（表3）。なお、工事業者との大きなトラブルはなかった。

（3）住まいの問題への対処について

1）住まいの問題に関する情報源および相談相手

住まいの問題に関する情報源は「知人」が多く、理由として「安心感がある」「信頼できる」などがあげられた。また、「情報収集は問題が生じたときのみ行う（調査対象者i、以下アルファベットのみ記す）」「インターネットを使い、人に聞くことはしない（k、n）」という意見もあった。相談相手は「家族・親戚」が多く、「地域のひとと住まいについて話すことはない（a）」という回答もあった。

2）事前に知っておきたかったこと

問題に対処する際に事前に知っておきたかったこととして、住まいの性能に関することがあげられた。また、補修・改修の対処方法、介護保険、バリアフリー改修の補助制度などについて情報の不足について指摘があった（表4）。

（4）居住意向について

1）親の代からの住み継ぎの経験

自分または配偶者の親の家を住み継ぎ現在住んでいるという回答は3/16であった（表5）。また、自分の住まいとは別に実家の空き家を管理しているという回答は4/16であった^{注3)}。

2）居住継続について

Z地区での居住継続を望む回答は、「住み続けたい」「住み続けるだろう」まで含めると14/16である（表6）。「住み続けたい」理由としてZ地区で形成された人とのつながり・ネットワークがあげられた。また、「住み続けるだろう」の回答理由は、「新しいところに移る資金がない（f、n）」「体が不自由になるまで（d、p）」「足腰が悪くなるまで（j、o）」など、経済的な理由や健康的な理由である。

3）住み替えについて

前述の居住継続の意向に対応する形で、住み替えについては「考えていない」という回答が13/16だった（表7）。現在は健康であること、すぐに転居しなければならない理由がないことから住み替えは検討していない。ただし、2世帯（a、d）は70歳代で住み替えを具体的に検討した経験がある。実際に住み替えに至らなかった理由として、「よい地域・物件が見当たらなかった」「高齢になって転居するのは大変である」「地域に人的つながりがある」「新たな場所で人付き合いを一から作るのは大変」などが共通してあげられた。

住み替えの検討については、「選択肢としていろいろ考

えることはよい、今の住まいに固執する理由はない（n）」「子どもが独立したら選択肢は増える（l）」などの意見があった。また、戸建住宅居住者からは、高齢期の生活を考えるとマンションがよいかもしれないが「マンションでの生活のイメージがわからない（i）」という声があった。

4）次世代への継承

調査対象者全員が自分の子ども・親戚への住宅・土地継承を考えていた。子世帯が現在の住宅に住むことを想定している回答は2/16だった（表8）。一方、「住宅・土地の扱いは子どもに任せる」という回答が13/16だった。

子どもに任せる場合、住宅・土地の扱いは「子どもが現在の家に住む（または建て替えて住む）」「売却する」

表4 事前に知っておきたかったこと

住まいの性能	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で見て歩いて聞いて、材質もしっかり知ることが必要。若いうちにやっておくとよい。 ・安さや機能は、1ランクのものにしたほうがよい。 ・キッチンの調理台の高さについては聞かれたが、トイレ、洗面台の高さの重要性についても気づけばよかった。 ・家を建てる当初は日当たりを考えたが、風通しのことも考えておけばよかった。
情報の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・対処方法を検討するための短所、長所をまとめた情報、実例や失敗例や、中古住宅の情報が欲しい。 ・図面だけでは完成の様子がわからないため、模型など具体的なイメージがつかめるものがほしかった。 ・市のバリアフリー改修補助制度について。 ・介護保険による住宅改修補助について。 ・介護予防になるような住まいについて。

表5 親の代からの住み継ぎの経験

住み継ぎの経験		回答数
経験あり	現在住んでいる	3
	別の場所にある実家を管理している（広島市外、山口県、島根県）	4
経験なし		9

表6 居住継続の意向

居住継続の意向	回答数
住み続ける（「住み続けたい」「住み続けるだろう」を含む）	14
将来は高齢者施設などへの入所を考えている	1
わからない	1

表7 住み替えの意向

住み替えの意向	回答数
いまのところ考えていない	13
将来は高齢者施設などへの入所を考えている	1
子どものところに移り住むかもしれない	1
将来のことはわからない	1

表8 次世代への継承の意向

次世代への継承の意向	回答数
子どもが住む（住むだろう）	2
住宅・土地の扱いは子どもに任せる（子どもが住むかどうかはわからない）	13
その他	1

などを想定している。なお、現在子どもが独立して夫婦ふたり暮らし10世帯^{注4)}の内、子世帯がすでに持家を取得している世帯は7世帯であるが、60歳代の世帯では親子の間で今後住まいをどうするか具体的な検討や意思確認はされていない。また、築数十年の住宅を子どもに譲ると子どもに維持管理の負担がかかるため、「更地にして売却して財産として譲るか、賃貸住宅を建てて譲る(m)」という意見もあった。

(5) Z地区における住生活について

1) 住まいについて

調査対象者全員から、現在の住まいについては基本的に満足しているとの回答を得た。そのような中で、住まいの問題・不安として、住宅の老朽化やバリアフリー改修の問題、子どもの独立後の余剰スペースの維持管理負担などがあげられた(表9)。また、敷地内の駐車スペースの不足^{注5)}、玄関前から道路までの階段や段差、マンションのエレベーター設置に関する問題^{注6)}があげられた。そのほかに、「今の住まいより、(離れた場所にあり空き家になっている)実家をどうするかの方が問題(f)」、「(近年、バリアフリー改修、屋根・外壁補修を済ませたため)ひとまず直したので問題ない(c)」などの意見もあった。

これからの住まいに必要なことについては、主に高齢化に伴う対応があげられた(表10)。また、経済的な理由や子どもへの相続も想定し「大がかりなりフォームはできない(o)」という意見もあった。

2) 地域生活について

Z地区での生活で満足していることとして、「子育て環境」「生活環境」「地域活動」「人とのつながり」があげられた(表11)。地区への転入理由にもあった中心市街地へのアクセスの良さ「子育て環境」の評価は高い。また地区内の人や地域活動への評価が高い^{注7)}。

Z地区での生活に関する問題・不安として、「生活環境」「子育て環境」「坂道・移動」「地域の高齢化」「地域活動」「人とのつながり」「住環境の老朽化」があげられた(表12)。地域住民が高齢化してきたことで、これまで見えづらかった生活環境の問題(坂道による高齢者の居場所の制限、見守りの体制)や住民間での助け合いの程度に関する指摘があった。また、今後生じる問題として地区にあるマンションの老朽化があげられた。

これからの地域生活に必要なこととして、学校、広場などの「地域資源」「地域活動」の後継者に関することがあげられた(表13)。また「世代が新しくなって、若い人が入ってくる。地域が廃れないことが希望(n)」という意見があった。

表9 住まいの問題・不安

	戸建住宅居住者	マンション居住者
住宅の づくり	・住宅の狭さ、老朽化(1) ・収納スペースが少ない(1) ・日当たりの悪さ(1) ・風通しの悪い(1) ・住宅の傾き(2) ・耐震性能(1)	・日当たりの悪さ、結露・カビ(1)
維持 管理	・建設業者のメンテナンス対応(1) ・世帯構成の変化による余剰スペースの維持管理負担(1) ・維持管理方法がわからない(1)	
高齢化 対応	・住戸内のバリアフリー化(3) ・介護対応の住宅(1)	・バリアフリー化(2)
外部 環境	・駐車スペースの台数(2) ・道路から玄関までの階段による外出弊害(1)	・共用エレベーターの問題(3)

() 内の数値は回答人数を示す。

表10 これからの住まいに必要なこと

高齢化 対応	・車いす対応、手すりの取り付け、段差解消等バリアフリーの住まい。 ・住む人の年齢によって住まいは変わり、生活の仕方・しつらえも変わるため、介護のこと知っておく必要がある。
住生活の あり方	・家は広くなく、必要なものが手に届く範囲で生活を送ることができればよい。 ・家に住んでいる者は大人なので、みんなが住みやすいように自覚すれば生活が流れていく。

表11 地域生活で満足していること

生活環境	・商業地ではなく住宅地で静かで、通り抜けできないのがよい(1) ・広島市中心部や広島駅に近い(8) ・自然環境が良い(3)
子育て環境	・子育て環境、教育環境がよい(4)
地域活動	・地域活動が活発(3) ・地域活動を手伝えなくても、非難はない(1)
人との つながり	・適切な近所づきあいがある(2) ・地域活動を通して人とのつながりを得た(5)

() 内の数値は回答人数を示す。

表12 地域生活の問題・不安

生活環境	・商業施設がない(5) ・銀行のATMがない(1)
子育て環境	・若い母親の孤立(1) ・子どもたちの防犯(1)
坂道・移動	・高齢者にとって坂道が移動・外出の問題となる(8) ・道幅が狭い(1)
地域の高 齢化	・ひとり暮らしや戸建住宅の高齢世帯の孤立(2) ・高齢化が進んでいるが、独立した子どもは帰ってこない(1)
地域活動	・後任がいらない(3)
人との つながり	・地域の人と付き合いがあっても何でも頼めるわけではない(2)
住環境の 老朽化	・今後一斉に老朽化する地区のマンションへの対処(2)

() 内の数値は回答人数を示す。

3) Z地区の住まい・地域に関する最近の動向

調査対象者が捉えているZ地区の住まいおよび地域に関する最近の動向として、高齢期に備えた平地への住み替えによる転出、高齢世帯の転居・入院等に伴う住宅の空き家化などがあげられた(表14)。一方、1970年代～1980年代にZ地区で育ち現在30～40歳代となり世帯を独立した子どもたちのうち、地区内の中古住宅を購入し親元近くに帰ってくる世帯がいることがわかった。

(6) 考察

1) Z地区の住生活の特徴および課題

Z地区の住宅は古いものは築40年を超える。一方で、近年社宅跡地が分譲されるなどして比較的新しい戸建住宅も建つ。また、築20年～築30年を迎えるマンションが多く、エレベーターのないマンションもある。今後10年程の間に大規模改修や建替えの検討が必要なマンションが増加する。住民が高齢化し、身体機能および経済力が低下する中で、住宅の維持管理負担が増すであろう。

Z地区では入居30年を迎え、世帯構成の変化や身体の変化に伴い、現在の生活と住宅との間にミスマッチが生じている。現時点で調査対象者はZ地区に住み続けることを望んでいるが、高齢期を迎えるにあたり、坂道があるため将来転居せざるを得ないと考えている。町丁によっては、高齢世帯の転居(施設入所・子との同居)による空き家が発生し始めている。今後、地区で生活をおくることができないとの判断があれば、さらに高齢世帯の転出が進む可能性がある。また、地区への転入理由が子どもの教育環境である場合、子どもが成人すると地区に住み続ける理由がなくなることが示唆された。

Z地区は住環境として緑豊かで静かであり、教育環境が整っていることなどが高く評価されている。一方、坂がある地域であり、商業施設・医療施設が地区内にないことが高齢期の生活の不安材料になっている。公民館や集会所が坂の上にあるため、坂道の上下の身体的負担を軽減する方策がないと高齢者の交流の場所としての機能を維持することが難しくなる可能性がある。

Z地区の地域生活の様子をみると、地域活動に参加することで人のネットワークが築かれ、調査対象者の生活における張り合い・生きがいを生み出している。地域に住む人がZ地区の財産であることがわかる。しかし、地域活動に携わってきた人たちが高齢期に差し掛かり、若い世代は共働き世帯が増えたため、後継者不足が懸念されている。

また、地域居住の継承についてみると、地区で育った子どものうち、進学・就職・結婚を機に地区外に転出した者は将来地区に戻って居を構える可能性が低い。一方

で、県内に就職した子どものうち、地区内の中古住宅を購入し親元近くに帰ってくる事例がみられる。このことは、Z地区が子育て世代の居住環境の選択肢となりうることを示している。

2) 居住経験活用の可能性

調査結果よりZ地区では居住継続を望む住民が多くいると推察されるが、住民の高齢化、住宅の老朽化が顕在化しつつある。地域居住を維持・継承していくためには若い世代が地域に転入して、人と住まいが循環していくことが求められる。そのためには高齢者が住み続けるための選択肢だけでなく、若い世代にとっても魅力ある居住の選択肢がZ地区にあることが望まれる。今回のヒアリング調査より見出せたZ地区の住民および住まいの共通点を表15に示す。若い世代や新たな転入者に、時間の経過とともに訪れるZ地区での住まいや世帯の変化を示すことは、彼らの今後の住生活の参考になるであろう。また、調査対象者の居住経験の中に今後の地域居住のヒントがいくつかみられた。図2に示す個別の居住経験はZ地区地域居住の選択肢を検討するための材料となるであろう。

表13 これからの地域生活に必要なこと

地域資源	・まちづくりの場としての学校(1) ・地域活動(祭り等)ができる場所(1)
地域活動	・地域活動の次世代への円滑な引き継ぎ・高齢化および若年層の共働き化による地域活動の引き継ぎ(3) ・退職後の男性の地域参加(2) ・その人ができる範囲での地域参加(2)

() 内の数値は回答人数を示す。

表14 住まい・地域に関する最近の動向

住み替え	・平地に移る高齢世帯がいる。 ・同じ町内や隣接する町丁でマンションから戸建住宅(建売、土地分譲)への住み替えがある。
空き家	・親世代80歳代は坂道が負担になり、子どもがいない人、子どもが帰ってこない人の中にはまちなかのマンションに転居した人もいる。家は空き家になるか、中古住宅として売却されている。 ・何年も空き家だった家が売られ、その跡地に4軒の家が建ったことがある。草が生え、塀も高く、防犯面のことを考え、地域が持ち主に対応を求めた。
Uターン 若者転入	・子世帯が親の近所の中古住宅買って帰ってくる。または親が近くに出た中古住宅を購入して子と呼び寄せるケースがある。 ・老夫婦が1人となった時、子どもに引き取られるか、老人ホームに入るかで、空き家となり、売却され、新しい人が入ったところもある。 ・戸建住宅が建つところには若い人が入っているようだ。 ・家族の中で循環している世帯がある。子独立後夫婦2人となり、夫婦は転居し、その後子どもだけが戻ってきて住むなど。 ・子世代が孫をつれて帰ってきている。地区のマンション、中古住宅などを購入、借りている。自分が育ってよい場所だったからという理由。
居住者像	・外見から家は変わっていないけども、家族構成は変わっている。女性高齢者の一人暮らしも多い。

表15 Z地区の住民および住まい像

時期	年齢	世帯構成	住まいの様子		
			築年数	維持管理の様子	家族・生活への対応
入居時	30～50代	夫婦＋子	～築10年	新築購入	子ども部屋の確保
入居10～20年	50代後半～	夫婦（子独立）	築10～20年	住宅外回りの補修・改修／設備更新	子ども部屋の空き部屋化
入居20～30年	60代～	夫婦または単身	築20～30年	住宅外回りの補修・改修／設備更新／バリアフリー化	子ども部屋の空き部屋化／掃除・階段昇降の負担
入居30～40年	70代～	夫婦または単身	築30～40年	将来を見すえた改修範囲の検討	身体的機能低下／介護対応

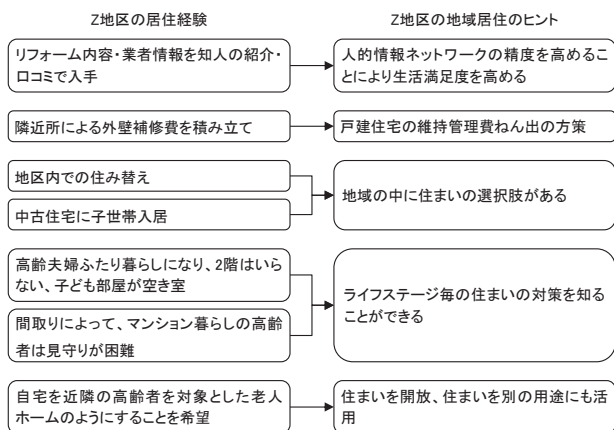


図2 Z地区の居住経験と地域生活の可能性

4. 今後の課題

今回のヒアリング調査より得られた居住経験や地域生活の様子はZ地区の現状の一部である。Z地区を構成する5つの町丁は人口構成、住宅構成に違いがあるため、地域居住の今後を考えていくためには、町丁ごとに住宅および住環境の現状を捉える必要がある。また、引き続き地域内の居住経験および居住継承に関する調査を行い、地域居住の継続・継承のための居住経験の共有のあり方について検討を行う。

謝辞

本研究のヒアリング調査にご協力いただいた広島市Z地区の皆様へ厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 筆者らの新築の住まいづくりプロセス調査（文献6）では、日常的には住まいの経験は個人間では共有されにくい、経験の共有は自身の経験の振り返りや今後の対処の参考になることが示唆された。よって、既存住宅の維持・継承においても同様の可能性を見いだせると考えた。
- 2) 隣近所数軒の交遊の中で生まれた取り組みである。工事業者や外壁の色なども皆で決めている。
- 3) Z地区にある5つの町丁のうち4つは1970年以降に入居が始まった。そのため、入居第1世代の出身地はZ地区以外であり、広島県内だけでなく広島県周辺県におよぶ。
- 4) 親と同居の世帯、子どもが大学生で県外の住む世帯を含む。
- 5) Z地区では開発当初、駐車スペースは自家用車1台分で土地が分譲された。そのため現在独立した子どもが帰省の際に車を駐車する場所が敷地内および地区内にない。
- 6) 1970年代、1980年代に地区内に建設されたマンションは3～5階建てが多く、それらにはエレベーターが設置されていない。
- 7) 調査対象者が全員地域活動に積極的に関わっていることが一因と考えられる。

引用文献

- 1) 計画開発住宅市街地の今後のあり方検討委員会，計画開発住宅市街地の再生に向けて，国土交通省，2005
- 2) 日本建築学会建築社会システムのあり方特別研究委員会，計画的住宅地は持続可能か？，2011年度日本建築学会大会研究協議会資料，2011
- 3) 小浦久子，郊外住宅団地の居住実態と市街地の持続に関する研究—神戸市高倉台団地における調査より，都市計画論文集，39号，pp. 625–630，2004
- 4) 池添昌幸，郊外戸建て住宅地の居住更新—郊外戸建て住宅地の居住継承と空間再編に関する研究—その1，日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1，pp. 197–198，2009
- 5) 西崎拓郎，志賀勉，竹下輝和，斜面住宅地における地域住情報データベースの構築・活用手法に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1，pp. 33–36，2010
- 6) 小林文香，妹尾理子，市民のための住情報提供に関わる課題と今後の方向性—住まいづくりプロセス調査からの考察—，建築教育研究論文報告集，No. 9，pp. 59–64，2009